

1

1

ギガンの男
—名も無き手記—

意々東蔵一

もう、夕方近くになった。そつと窓のすき間からのぞいてみると、外はまた暗くなりはじめた。

暗くなってしまったら、あの人たちがワタシをつかまえに来るんだ。

——暗くなってしまったら。

ドアか窓をこわして家のなかに入り、ワタシをつかまえるんだ。

ワタシは井戸のなか、暗い場所につれていかれるだろう。たぶん、ウウンきつとおじいちゃんも、おばあちゃんも、そこにいるはずに違いないんだわ。

あの、シヨゴスのいるところへ……。

丘の地下には広い世界があるんだ。あの人た

ちはそこにかくれて、生けにえや血をもとめて出てくる機会をうかがってるんだ。

生けにえにする以外は、人間にいなくなつてほしいんだ。

待つて。あの人たちがやってきた。

もう夕方になっている。

あいつらの足音が聞こえる。ほかの音も。

声も。べつの音も。ドアをたたいている。そうだ——ドアをつぶすために木か丸太をつかっているんだ。家ぜんたいがゆれている。オズボーンの叫び声が聞こえる。あのぶんぶんうなるような声も。ぞつとするにおいがする。はきそうだ。もうすぐ……もうすぐ……。

ドアが大きな音をたてて……

日記はここで途切れていた。

屋根裏部屋に残された書きかけの日記より
抜粋。

下からドアがこわれた音がきこえた。ドルイドたちが家に入ってきたんだわ。

オズボーンの声が聞こえる。

かいだんを上る音が聞こえる。

このままだとワタシのかくれている屋根裏部屋も見つかってしまうだろう。だんだんと近づいてくる足音。

ドンドン扉を叩く音が近くで聞こえてきた。部屋の側まで来てしまった。

ドンドンドンドン

とうとう部屋の扉を叩く音が聞こえてきた。ドルイドたちがドアをこわしてはいつてきた。

次々に押し入ってくる男たち。

小さいころお婆ちゃんに聞かされたドルイド。それが今日の前にいる。

ドルイドたちをかき分け一人スーツ姿の男が姿をあらわした。オズボーンだ。

「やありリイ。ひどいじゃないか。私を家に入れてくれないなんて」

「あ…ああ、ああ……」

「どうしたんだい？」

もうワタシは助からないんだ。そんな絶望で頭が一杯になる。

「ああ彼らの事かい？彼らは僕の友達さ。

この森のことなら何でも知っている。さて、悪い子には、お仕置きが必要だね」

もうダメッ！

ガッシャアアーン！

そう思ったその時、窓ガラスのわれる音と

いつしよに、何かが部屋にとびこんできた。

オズボーンとワタシの間にその何かが割って
立っていた。

それはコートを着た長身の男の人だった。

予想外の人間がいることにとまどうドルイ
ドたち。

コートをパンパンと叩きながらワタシの方を
振り返ると手を差し伸べて言った。

「君がリリイかい？オレは君に会いに来たん
だ」

それがハロウインの夜におきた不思議な、誰
も信じないようなできことの始まりでした…
…。



遡ること数日前。オレの事務所には珍しい事に、本当に珍しい事に依頼の手紙が届いていた。

「今時、封筒とは差出人はかなり古風ね、いいシユウしてるわ」

相棒の輪廻が少し感心したように呟く。

腰まで届く艶やかな長髪。西洋の陶器

人形を思わせる顔立ち。美術品のような白い手。まさに絶世の美女とは彼女の事と言っ

ても過言ではあるまい。それが命野輪廻とい

う女性を現す言葉といえよう。

手渡された封筒をビツと破り、中身を見た俺は息をのんだ。

「確かに珍しいな。だけど差出人はもっと珍しいぜ。なんせ『本喰い』直々の召喚状だ」

「ええつ、本喰いから？アナタ何したの？」

「さあ？身に覚えがあるような、無いような」

今までの依頼の中には図書館絡みの物もあつた。それを考えると無いとは言いい切れないのも事実だ。

合法、非合法は問題では無い、ここは旧市街なのだから。

五分ほど振り返ってみたが、一向にわからない。俺は考えるのを止めた。下手の考え休

むに似たりだ。

そうと決まれば後は一つ。俺は膝を叩くとソファから立ち上がった。

「まあいいや、行ってくるわ。本人に聞けば分かるだろうさ」

「いつてらっしゃい。ならコッチの件はやっておくわ」

ピラピラっと手を振る。

「さすがリンネさん、気が利くね。それじゃあオレも、マジメに仕事すつかなあ」

オレは軽口を叩くとソファに引っかけてあった愛用のロングコートに袖を通すと事務所を後にした。

ここは旧市街、図書館跡。

俺、言吹 ことみき 森羅 しんらは旧市街の図書館跡にやってきた。

敷地内は雑草が生い茂り、図書館は半壊していて所々屋根や壁が崩れている。階段の名残や風雨に晒され腐食した、かつては机と椅子だったもの。ヒビ割れたタイル、タイルのすき間から伸びている雑草。勿論、本なんて一冊も残っていない。ここは既に図書館では無い、ここは廃墟だ。ここが図書館だった頃の姿を想像できる者はいない。

そんな廃墟には誰も近寄る事すらしない。俺は誰も近寄らなくなった廃墟に足を踏み入れると、館長室、否、かつて館長室だった部屋へと向かった。

館長室は不思議な事に図書館の中心部にある。館長室の前に着いた。消えかけていて少々見辛いが確かに「館長室」と書かれたプレートがぶら下がっている。俺は館長室に入ると、部屋を中心に手を伸ばした。

この図書館は秘密がある。

ガコン、と音がした。同時に左右に開く床。そして地下へと続く階段が現れたのだった。

地下へと続く階段を下りると、そこには本、本、本。本の海があった。

一握りの人間しか知らないもう一つの図書館がこの街にはある。

それが地下大図書館、通称『ライブラリ』である。

この地下大図書館、通称“ライブラリ”は

世界屈指の情報機関である。

曰く、ここは世界中から情報と本が集まる。曰く、ここには古今東西ありとあらゆる本があるとまで言われている。

図書館の中心にはスーパーコンピュータ『ライブラリ』がある。ライブラリを介した仕事の斡旋、様々な分野の最新情報と言った物を登録している者であれば誰でも見る事が出来る。

この端末は旧市街のライブラリ配下の情報屋でも見る事ができる。

ライブラリの名前と配下の情報屋についてはアンダーグラウンドの人間なら誰でも知っているが、地下図書館の存在を知るものは少

少し時間より早く着いた俺は手近な本を手に取り、しばし読書を始める事にした。

読み始めて五分位してから声が聞こえた。

「珍しいこともあるものだね。貴方が時間通りにくるなんて」

俺は本を閉じると声のする方に顔を上げた。

「フフン、オレだつてたまには早く来るさ。な

んせ“本喰い”直々の呼び出しなんだからな、この街の人間なら誰だつてそうさ」

前方にはフードを目深に被った人物がやって来た。

彼(彼女)こそ、この図書館の主。通称“本喰い”である。

彼は全ての情報とこの増え続ける大図書館の本を全て記憶しているという。

その一切のプロフィールが謎の包まれており、分かっているのは「本喰い」という二つ名だけ。

彼の事を旧市街の住人はこう呼ぶ。

“奇人”本喰いと。

彼はこの街の復興に尽力したとされる

“四人”内のひとりである。

室内だと言うのにフードを被り、表情が良くわからない。

「呼んだのは他でもないんだ。貴方に頼みたい仕事があるんだ。ただ、この街の事件ではないから少し遠くへ行つてもらおうよ」

「遠く？ おいおい、どういふこつた？ アンタ

が斡旋する仕事はこの街限定じゃなかったのか？」

「今回はいわゆる特例ってヤツなの。これ以上は部外者には教えられないよ。どうだい受けてくれるかな？」

「アンタからの頼み事なんて珍しいな。そんなヤバイ事件^{ヤマ}なのか、今回ののは？」

俺は真剣な顔で聞き返した。

「そうだね、S級の事件だね。さてどうする無理強いはしないよ」

「アンタの立場なら一言『やれ』って言えばいい事じゃなか。なんでわざわざ頼むんだよ」

「さっきも言ったろ、無理強いは好きじゃないんだよ。なんならご希望通り、色々ちらつ

かせてもいいけど、それが好み？」

「冗談です。止めて下さい」

「確か事務所の家賃滞ってたんじゃなかったっけ？」

「分かった。受ける、受けます。やらせて下さいッ！」

平身低頭で頼み込んだ。

そんな俺を見てキシシ笑って言った。

「素直でよろしい」

「さて、じゃあ仕事の説明をしようか。今回は旧市街の事件じゃないって言ったろ。まズルーズフォードって所に行ってもらおうよ。」

「そこにはあるモノが封印されているんだけ

13
 ども、最近その封印が解けかけているみたいなんだ。今回の依頼は、その封印の調査と再封印」

「ああ、手配の方は済ませてあるから」

「詳しくは現地にいる協力者に聞いてくれ」

「協力者？そんなのまでいるのか？今回は何から何まで特例づくしだな」

「じゃあヨロシク頼むよ。言吹森羅、ギガンの男よ」

キシキシと本喰いは

―旧市街、ライブラリ館長室

遡る事数日前……ライブラリ館長室。

机の上には書類山々と連なり山脈と化し机の上を占領している。

「マスター、お茶をお持ちしましたー」

少女がティーポット片手に入ってきた。

「ああ、ありがとう。そこに置いておいてくれ」

書類の山から声がする。

慣れているのか少女は書類を片付け、ティ

ーカップを机の上に置いた。

否、置こうとした瞬間、部屋全体がカタカタと揺れ出した。

「きやあつ」

ガチャン

突然の揺れにカップを床に落としてしまった。

揺れは次第に強くなり、部屋全体がガタガタと大きく揺れ出した。

「マッ、マスター」

揺れが大きく、立っていられなくなった少女は本喰いに助けを求め

揺れは二、三秒もするとピタリと収まった。

少女は辺りを見回すとハッとした。

激しい揺れだったはずなのに、本棚の本は一冊も落ちていなかった。机の上の書類山脈は崩れてすらいらない所か一枚たりとも落ちていないのだ。

「フフ久しぶりだね」

机の向かい側にある応接用のソファにいつもの間にかスーツの男が座っていた。

「もっと静かに入って来れないのかい、貴方は？」

本喰いは読んでいた本を閉じると嘆息しながら言った。

「何を言ってるんだ。いつもより今日はスマートだったじゃないか」

侵害だと言わんばかりに言い返す謎の男。

半ばあきれながら、論じるのも無駄と悟った本喰い。

「ああ、まーそうだけど、もうちよつと常識考えてくれないか」

「ま、ますたーこ、こちらの方は……」

男は少女に気づく立ち上がり恭しく会釈すると朗々と名乗った。

15

15

「おお、すまないお嬢さん。コレは失礼、僕とした事が自己紹介がまだでしたね。僕はインディーズ＝ライト。彼の昔馴染だよ」

芝居がかった仕草で男はライトと名乗った。

「ふうん、今の名前はそれかい」

ライトの方をジロつと見ながら本喰いは言った。

一人、状況を飲み込めずオロオロする少女。

「そ、そうだお茶お持ちしますねっ！」

立ち上がるとタタタと走りだし部屋を出て行った。

「良い子じゃないか」

「ああ、マジメが取り柄の一般人だ。貴方

みたいな規格外が関わって良い人種じゃないよ、くれぐれもちよつかい出さなくてくれよ」

しれつと言いつつ本喰い。

「アハハ、それを君が言うのかい。君の二つ名は僕の耳にも届いているよ。なんでも“奇人”と呼ばれているそうじゃないか」

朗らかに笑いながら言い返すライト。

「で、一体何のようだい？」

聞かれてライトは思い出したようにポンと手を打つと右手をスナップさせた。

スナップすると一瞬で封筒が現れた。

「君に会うのが久しぶりでつい、会話に熱が入ってしまったようだ。すっかり忘れていたよ、これが用件だ」

ピツと封筒を投げてよこすライト。

本喰いの前に綺麗に落ちると封筒が一人でに開いた。中には数枚の紙切れが入っていた。

「ん…これは、日記か…」

「ご名答」

歌うように答えるライト。

「これがどうしたんだい？」

「まあ読んでみてよ、話しはそれからさ」

「もう読み終わったよ」

「もう読み終わったのかい？流石だね、本喰いの名は伊達ではない、か」

目を通してまだ十秒と立っていない。

「この日記がどうかしたのかい？何やら事件に巻き込まれている用だが…いやまあ、どこかで似たフレーズの本を読んだ事がある」

「おっと、そこまで。考え事はそれ位にして話を聞いてくれないか」

「…分かった。で話しとはなんだい」

「キミは仕事の仲介もやっているんだってね」

「ああ、それが今の生業だからね」

「では一つ頼まれてくれないか。依頼人は僕と、その日記を書いた少女だ」

「話しを聞こう」

「放っておけば、この少女は死ぬ。間違いなくね。僕としてはこの少女を助きたい。正確には、この少女を殺そうとする存在が気に食わない。彼らにはまだ眠っていてほしいからね。僕はもっと自由を満喫したい。結果、少女を助ける事につながると言うワケさ。簡単だ」

「なるほどね、貴方絡みの仕事ってことだね。」

「この街には腕利きの人間が一杯いるのだから？ 紹介しておくれよ」

「相手は誰だい？ それによつて人選するか」

「——シヨゴス」

ライトはポツリと言った。

「うわあ、また厄介なのだねえ」

「まだいいだろう？ 火星の彼や、星渡りの彼じゃあないんだから。ああ、ちなみにシヨゴスとは言ったけれどホンモノじゃあない。正確には黒山羊さんの数いる子供の一頭さ」

笑いながらイヤイヤと手を振る本喰い。

「イヤイヤその二人なら丁重にお断りさせてもらうよ。黒山羊さんの子供かく。なら彼なんかどうかな？ 面白い技を使う。他にも何人か候補はいるけど、依頼内容は救出と封印なんだろうか？」

書類取り出し渡す本喰い。

「ああ、そうだよ。彼女は管理者の末裔でね、あまり死なれると困るんだ。もつとも本人達はとつくの昔に忘れていた事なんだがね」

「他の面子は腕は確かだが人格に問題があつてね。殲滅ならそつちなんだが救出となると彼が適任だ、天の邪鬼だが面倒見は良いんだ彼は」

クククと肩を揺らし笑う本喰い。

受け取るライト。

「ほほう、これはオモシロイ。ウンいいね。実にイイ。ギガンの男、か気に入ったよ。彼に依頼しよう」

「わかった。伝えておこう。彼に簡単な説明をしたらルーズフォードに向かわせるから状況とかはそっちで説明してくれよ」

「わかった。あつちでコーヒーでも飲みながら待っているよ。話しも済んだ事だし、そろそろ懸命に廊下を走っているお嬢さんにドアを開けて上げようか」

そう言つて右手をパチンツと鳴らした。

ガチャリ。

館長室の扉が開く。

「お、お待たせしましたッ！お茶をお持ちしましたッ！」

息を切らせて入ってくる少女。

「なんだか廊下が長く感じて、走つても走つてもお部屋に辿り着かなかつたんですよう」

半泣きだ。

「不思議な事もあるものだねえ。しかし折角お茶を用意してくれたのに、悪いけれど僕の用件は済んだ。これからすぐに出なくてはならない。次の機会に取っておくでしょう。貴女の煎れたお茶を頂く事にしよう。今日の所は二人で飲むと良い」

「ではまた。次は事の顛末でも話すとしよう」

「ではまた」

ゴォ、と部屋の中でライトを中心に一陣の風が巻き起こった。

19

19

「ギャア」
神を押さえる少女。

風が収まると、ライトの姿は無くなっていた。
た。

—今度は静かだったろう。
部屋にライトの音が響いた。

「マ、マスターあの人何だったんですか？」
恐る恐る訪ねる少女。

「ん〜変人、かな」

「はあ」

気の抜けた返事をする少女。

「類は友を呼ぶ、ですね」
と少女は笑っていった。

「キミも言うようになったね……」
たらーんと汗が出ている本喰い。

「さ、遅くなりましたけどお茶にしましよ
う」

そう言うとコポコポとティーカップに紅茶
を注ぐ少女。